

『資本論』の草稿研究の日本における最近の動向*

—新メガ第IV部門の編集作業との関連において—

竹永 進

はじめに

三巻（あるいは『剰余価値学説史』を含めれば四巻）からなる『資本論』は、過去一世紀以上にわたり経済学者としてのマルクスの主著として多くの読者を獲得し、膨大な数にのぼる理論的・実証的な研究を生み出してきた。本来、マルクス本人がめざしたような科学的な研究は自由な批判的精神をもってなされるべきものであるが、にもかかわらず、20世紀において約70年間続いた旧社会主義体制のもとでは、『資本論』はマルクス主義と呼ばれる世界観の中核に位置するものとして、社会主義諸国（特に、最初に成立した旧「ソ連邦」）の政権を担う事実上の独裁政党によりその読み方・解釈が著しく制約されてきた。さらに、これらの政党が権力を掌握していた諸国にとどまらず、その影響下に置かれてきた資本主義（および「発展途上」）諸国においても同様の現象が見られた。『資本論』は完成された体系として經典化され、その理論と思想は紋切り型の教科書的叙述を通じて社会主義か資本主義かを問わず多くの国で広く宣伝・普及された。このことは、マルクスに対して批判的な立場を取る側にとっても大同小異であったのであり、ステロタイプ化された理解に基づくマルクス・プロパガンダと同じく同様なレベルの理解に基づくマルクス批判とが対峙するという不毛な状況が長く続いた。そして現在においてもなおその余韻は消えやっていない。

しかし、『資本論』が決してマルクスにより完成された体系的な著作ではなく、彼の資本主義経済とその経済学（古典派）の双方に対する体系的な批判の構想のごく一部を体現したにすぎないことは、マルクスの研究活動を生涯にわたって身近に見ていたエンゲルスにとってはもとより自明のことであったし、マルクスとエンゲルスの没後に彼らの残した膨大な文献的遺産の内容が明らかになるにつれていよいよはっきりしてきたはずである。このような動きは、上記のような經典化・教科書化の動きとほぼ同時並行して、エンゲルス没後の20世紀初頭から始まっていたと考えられる。エンゲルスの没後にマルクスとエンゲルスの遺稿類を委託されたドイツ社会民主党の「理論的責任者」カール・カウツキーはその最初の担い手であったと言える。彼は自らも深く関わっていた同党の理論的機関誌*Die neue Zeit*に自らの草稿研究の成果を公表するとともに、マルクスが1861年から63年のあいだに書いた「経済学批判の第二草稿」の一部をなす『剰

* 本稿は、中国文部省の2011年度の哲学・社会科学大規模研究基金からの補助を得たプロジェクト「『資本論』とその草稿の再研究」(NO. 11JZD004)の暫定的な研究成果である。

『余価値学説史』を『資本論』の第四巻として初めて公にした。しかしカウツキーによるマルクスの文献的遺産の研究と解説は彼自身のいかに大きな個人的力量をもってしても、極めて部分的なものにとどまらざるをえなかったし、当時の彼のロシア革命とその指導者レーニンとの対立関係から、彼の仕事はなかなか正当に評価されなかった。

カウツキーよりもやや後の世代に属するロシアのデヴィッド・リャザノフはロシア革命直後の1920年代の初頭から、モスクワに設立されたマルクス・エンゲルス研究所の所長として、ちょうど同じ頃にフランクフルトに設立された社会研究所 (Institut für Sozialforschung) や社会民主党中央文庫とも緊密な連絡を取りつつ、マルクスとエンゲルスの文献遺産を集大成した将来の全集 (MEGA) のための基礎準備を開始していた。最初レーニンによって提起されたと言われるこの大規模な企画は、多大な予算と人員を投入した真に大規模な企画としてはじめて遂行可能なものであった。リャザノフはこの本格的な全集の実現に向けて、ドイツをはじめヨーロッパの各地に散逸していたマルクスとエンゲルスの文献遺産 (刊行された著作の翻訳を含むさまざまな刊本、遺稿、抜粋・切り抜きノート、両者間および第三者との間の書簡、種々の書き込みを含む蔵書) を収集し、その解説とタイプ原稿化を推進した。このためには語学力をはじめとする種々の特殊な能力を有する多くのスタッフの共働が不可欠であった。また彼はマルクスとエンゲルスが彼らの文献遺産中で引用・言及している文献資料の原本 (書籍、新聞雑誌などの定期刊行物、各種の報告書など) の収集にも努めた。

こうした永年にわたる地道な作業がMEGAの諸巻として結実し実際に刊行されはじめたのは、1920年代の末になってからのことであった。それまでも、またそれ以後も、MEGA作業の遂行はソ連の国家事業の一環でありながら、絶えず何らかの形でスターリンをはじめとする権力の中枢部との軋轢をともなった。この根本的な原因は、マルクス (=レーニン) 主義を掲げる国家が自己の正統化のために広く国内に流布しようとした教義の体系が、あくまで在野の人間として活動を続けたマルクスやエンゲルスの自由な思考とは異質な相容れないものであったことにある。リャザノフの緊密な協力者でありMEGAの基礎準備に多大な貢献をするとともに極めて独創的な『資本論』の理論的・学説史的研究を行ったイサーク・ルービンは、1920年代を通じて獄中生活を繰り返し30年代初頭以来その行方は杳として知られなくなった。同様にリャザノフ自身もルービンからの「告発」を受けて研究所長を解任されおおよげの場から姿を消すことになった。MEGA事業そのものは彼の跡を継いだアドラツキーを所長とするマルクス・エンゲルス・レーニン研究所によってしばらく継続されたが、1930年代半ばのスターリンによる第二次大量粛清の時代に中断を余儀なくされた。

第二次世界大戦は、アメリカ・イギリス・フランス・ソ連からなる連合国側の、ドイツ・イタリア・日本からなる枢軸国側に対する勝利として、1945年夏の日本の無条件降伏をもって終結した。この第二次世界大戦の一つの結果が、東欧からアジアにまたがる社会主義圏の拡大 (ソビエト連邦を中心とした「社会主義世界体制」の成立) であった。連合国側の一員であったソ連は、戦後処理が一段落して第二次世界大戦後の新たな世界秩序が形成され始めると、西側資本主義諸国との対立関係を深めてゆき、1950年前後の朝鮮半島の危機を契機に東西冷戦体制が成立

すると、「東側」の盟主として「西側」の盟主のアメリカと厳しく対立するにいたった。このような世界政治的環境の中で、東側のイデオロギー的一体性を確固たるものとするための武器としての「マルクス＝レーニン主義」が、東側の諸国とその影響を受けた西側の左翼陣営の中で公式の教義として鼓吹され、多くの通俗的な解説書をもちいたプロパガンダが繰り返された。

このような状況においては、戦前に着手され中断されたままになっていた、マルクスとエンゲルスの文献的遺産を復元しておおやけに提供し彼らの思想のオリジナルな姿の研究と理解に資することを目的とする、MEGAのような企画が重要視されなかった（むしろ緊急性の低いものとして後回しにされた）のは当然の成り行きであった。ソ連共産党中央委員会に直属するマルクス＝レーニン主義研究所と、ドイツの東西分割によって成立したドイツ民主共和国（旧東ドイツ）の政権党であったドイツ社会主義統一党の中央委員会に直属するマルクス＝レーニン主義研究所において、戦前のメガを受け継ぐ新しい全集の企画を立てようとする動きがあったようであるが、当時ソ連の研究所で進行中であったレーニン全集の規模をはるかに上まわる規模となることが予想された新しいメガの企画は、ソ連共産党の圧力によって実現不可能となり、代わってレーニン全集とほぼ同じ規模（全40数巻）となるMEW（マルクス＝エンゲルス著作集）が東ドイツの研究所を中心として編集・刊行されることになった（1956年から1968年）。この「著作集」にはマルクスとエンゲルスの生前の諸著作や書簡の主なものほぼ網羅されていたとはいえ、いくつかの重要な著作や書簡（とくに第三者宛・第三者からのもの）、また、草稿や抜粋ノートは多くが収録されていなかった。

1950年代末から西側が高度経済成長を続けるとともに東側との政治的・軍事的・イデオロギー的対立を深めていた時代に、東側では、スターリン没後のフルシチョフによる「スターリン批判」をめぐる評価から始まり、さらにその後の中ソ論争に象徴されるような「国際共産主義運動」内部での分裂と多極化が進行した。同時に60年代に高揚した西側諸国の学生運動・労働運動などの左翼反体制運動の内部においても、事実上ソ連共産党の指導下に置かれていた各国の共産党（正統派）に反旗を翻す諸潮流が簇生した。このような中で、スターリン体制の下で党官僚の支配下に置かれた執筆者群の手になる官製の「マルクス＝レーニン主義」に対しても疑問が付き、マルクスやエンゲルスのオリジナルに立ち返って彼らの思想・理論を再検証しようとする動きが広がった。もとより彼らの理論的活動は極めて広範囲にわたるが、経済理論がその中核をなすことは言うまでもない。60年代末から学界の一角で始まった『資本論』の草稿研究は、学問世界を取り巻くこのような一般的な背景の下でその意味が十全に把握しうるであろう。もっとも、事実上の『資本論』の草稿研究が草稿の現物にじかに接することのできるごく少数の関係者に限らず一般の研究者の手によっても進められうる環境は、20世紀の初頭に『剰余価値学説史』その他の断片がカウツキーによって刊行され、そして二次大戦後まもなく『経済学批判要綱』が東ドイツから刊行されて以降、事実上徐々に整えられつつあったとも言える。

しかし、これらの草稿研究のための資料はマルクス（そしてエンゲルス）の残した『資本論』関連の文献遺産のごく一部にすぎず、これらが全体として世界中の一般研究者の手にオリジナルに近い姿で供されるためには、新たな批判的・歴史的マルクス・エンゲルス全集（新メガ）の企

画刊行を俟つほかなかつた。レーニン全集とMEWの企画が一段落した1960年代の末から上記の両マルクス＝エンゲルス研究所内で再度新しくメガを編集し刊行しようとする動きが活発になり、70年代に入って本格化し具体的なプロジェクトとして刊行準備が始められることになった。当初策定された計画によれば、新メガは150巻あまりからなる四つの部門から構成され、20世紀末までの残された30年弱の期間（ちょうど第二次大戦から当時までの時間幅に対応する）に完了するものとされた。このためには年平均5巻程度のペースで刊行を続けて行かなければならなかったが、1975年から実際の刊行が開始されるとそれが不可能なことはまもなく明らかになった。とりわけ、ソ連・東欧の崩壊が差し迫っていた80年代中葉以降は刊行ペースが著しく停滞し、20世紀末までの完了はおろか完了までにどれだけの時間が必要なのかさえ見通しが曖昧になってきた。そして89年末のベルリンの壁の取り壊しに象徴される旧社会主義の崩壊が起こった。この体制に支えられて存在していたMEGAも一時存亡の危機にさらされ、その刊行は20世紀末から21世紀初頭までのおよそ10年間停止を余儀なくされた。

さいわいなことに、メガは、マルクスとエンゲルスの文献遺産の多くを保有するアムステルダムの社会史国際研究所を拠点として新たに設立された国際マルクス／エンゲルス財団により引き継がれ、その後現在にいたるまでほそそと存続を続けており、この20年間あまりに着実に実績を上げてきた。このような新しい編集と刊行の体制が出来るにあたって極めて重要な役割を演じたのが、世界各国のマルクス・エンゲルス研究者たちによるボランティア的な協力活動であった。ロシア、ドイツは言うにおよばず各国に編集活動をになう大小の規模の編集グループが設立され活動を開始した。およそ一世紀におよぶマルクス研究の長い伝統を持ち先進資本主義諸国の中では例外的に多数のマルクス研究者を擁する（といっても、30年あまり前からその数は徐々に減少傾向をたどっているが）日本でも、90年代初頭から一部の研究者によりメガ存続のための活動が始められ、現在にいたるまで紆余曲折を経ながら続けられている。彼らの活動により新メガ第II部門の第11巻・第12巻・第13巻が2005年から2008年にかけて現実に刊行の運びとなった。もちろんドイツやロシアのネイティブ・準ネイティブの専門家からの支援を受けてのことであったが、それにしても、日本の研究者の一部からこのような実績をとまなう貢献がなされようとは20数年前までは想像もされなかった。

これらのすでに完了した諸巻にとどまらず、現在IMES（90年代初頭に設立された新メガ編集を担う国際機関。Internationale Marx Engels Stiftungの略称）からの委託を受けて日本で編集作業が進められ（ることになっ）ているのは、マルクスの抜粋ノートを収録する第IV部門の第14巻・第17巻・第18巻・第19巻である。これらはいずれも1850年代末から1860年代末までの、マルクスが経済学批判（ないし『資本論』）の構想の具体化をはかりその主要な草稿を執筆した、極めて重要な時期に作成された抜粋ノートを収めるものである。第14巻は、1857年末から58年はじめまでの短期間にマルクスが後に『経済学批判要綱』とよばれることになる草稿の執筆とほぼ並行して、この時期にヨーロッパとアメリカで進展しつつあった恐慌についての記事を定期刊行物から抜粋ないし切り抜きして作成したノートを収録するもので、編集作業が比較的遅く始まったにもかかわらず刊行間近の状態まで進んでいるようである。第17巻はマルクスが

1861年から63年にかけて二度目の「経済学批判」の草稿を執筆した時期の最後に、これを基に最終原稿を執筆する際にもちいる目的で作成して抜粋ノートを取録することになっているが、この巻についての編集作業はまだまったく手つかずの状態であり、いつから始められるかも今のところ見通しが立っていない。第18巻は1864年2月から1868年9月までの間にマルクスとエンゲルス（大部分はマルクス）が作成した主として『資本論』第三部第6篇の地代論に関連する文献からの抜粋を取録するものである。この巻についての作業は今世紀に入ってからの10年あまりのあいだ細々と継続されテキスト部分の仕上げとアパラート部分の作成まで進んでおり近年中に完了して刊行まで進められる見通しである。最後の第19巻は、1868年9月から1869年9月までのおよそ一年間にマルクスが1866年に勃発した新たな恐慌について当時の新聞記事から作成した、関連記事の抜粋と切り抜きのノートを取録するものである。2010年前からの数年間の編集作業によりこの巻のテキスト部分はほぼ完成しており、その最後の仕上げとなおアパラートの作成を課題として残しているが、近い将来の完成をめざして鋭意努力中である。

以上の第IV部門の4つの巻のうち筆者がその編集に直接に加わったのは第18巻と第19巻の2つの巻であり、本稿ではこれらの巻の概要および編集作業に関わる過程で明らかになってきたその意義について、スペースの許す範囲内で述べていくことにしたい。

新メガ第IV部門第18巻の概要とその意義

新メガ第四部第18巻には、1864年2月から1868年8月までの期間にマルクスとエンゲルスが作成した抜粋ノートが取録されることになっている。取録予定のノートのうちマルクスの作成したものは12冊（ノート番号101から112）、エンゲルスのそれは3冊（同じく201から203）であるが、エンゲルスのノートはここでは考えないこととする。マルクスのこれらのノートには、著書、定期刊行物、新聞からの抜粋と切り抜きが含まれる。これらのノートが作成された期間中に、マルクスは『資本論』全三部の最初の草稿を執筆し（1863年8月から1865年12月）、1867年9月に出版された『資本論』第一部初版の最終原稿の仕上げと刊行準備をし（1866年1月から1867年7月）、さらに、この準備作業に引き続いて直ちに、当時マルクスが抱いていた計画によれば第二部と第三部を含むこととなる予定であった続巻のための準備作業を開始した（1867年8月以降）。この時期は、『資本論』全三部に同時に関連する『資本論』形成史上の決定的な局面を画すものである。

以下、マルクスが1860年代の中葉に行った抜粋の要点を検討してみたい。その際特に、これらの抜粋と並行してあるいはその作成の後に書かれた『資本論』の草稿類のために、これらの抜粋がどのように利用されたかという点に留意する。これは、マルクスがこれらの抜粋を作成した目的を知る手がかりとなるであろう。

上記の12冊の抜粋ノートはその含む内容の点でも分量の点でもばらつきが大きく、ここでは重要と思われるもののみを取り上げることにする。それは次の5冊である。ノート番号とそれぞれの推定作成時期を記しておく。

105 1865.8-9~1866.2

108 1867.8~1868.9

109 1868.5~1868.12

110 1868.4-11~1878

111 1868.4~1868.5,1870,1877

(執筆時期の推定は次による: *Allgemeiner Prospekt der Bände 13 bis 32 (Neufassung)*, Richard Spert, 1995)

以上5冊のうち特に重要なのは105と108であり、前者の推定作成時期は第三部主要原稿後半の執筆時期と重なり、後者のそれは第一部初版刊行直後の第二部・第三部の仕上げ作業の開始と同時に始まっている。他方、上にあげなかった12冊の抜粋ノートのおよそ半分は上の5冊に比べてはるかに少ない抜粋しか含まず、またそのうちの何冊かは1ページないし数ページのみ抜粋からなっている。

まず1865年後半の抜粋(ノート105)について見ていこう。前述のマルクスによる『資本論』の準備と刊行のための作業から、それぞれの時期に彼が関心を持っていた主題を扱った経済学文献からの抜粋作成の活動が活発になされた二つの局面を予想することができる。その第一は1865年の8月ないし9月から12月にかけてである。この時期を通じて、マルクスは日中は大英博物館で抜粋を作成し、夜間は最後の三章(ないし現行版『資本論』では三篇)を執筆した(1866年2月13日付けのエンゲルス宛の手紙、MEW, Bd.31, S.178)。このように執筆と読書(従って抜粋の作成)は並行して進められ、両者は当然密接な関係にあり後者は前者の支えの役割を果たした。また、マルクスが読んで著作やその他の資料の主題は、『資本論』第三部の最後の三章(篇)で扱われるテーマとそれらに関連する諸問題、とりわけ利子生み資本と地代に関するものであった。

ノート105で行なわれている抜粋のうちの若干のものは、マルクスがほとんど同時並行的に書いていた草稿の第六章(篇)の中で引用ないし言及されている(例えば、Morton, John Lockhart, *Treatise on the resources of estates*, London, 1858 (680, 681), Lavergne, Louis-Gabriel-Léonce Guilaud de, *The rural economy in England and Scotland*, Edinburgh, 1855 (682), Dove, Patrick Edward, *The Elements of political science etc.*, Edinburgh, 1854 (684, 689), Maron, H., *Extensiv und Intensiv. Ein Kapitel aus der landwirtschaftlichen Betriebslehre*, Oppeln, 1859 (748), Mounier, L., *De L'Agriculture en France d'après des documents officiels, avec des remarques par M. Rubichon, en deux tomes*, Paris, 1846 (748, 751), Liebig, Justus, Freiherr von, *Die Chemie in ihrer Anwendung auf Agrikultur und Physiologie*, I Theil, Braunschweig, 1862 (753, 833), Johnston, James Finlay Weir, *Notes on North America etc.*, 2 vol., London, 1851 (781-784)。括弧内の数字はMEGA², II, 4/2 (Karl Marx, *Ökonomische Manuskripte*, 1863-1867, Dietz Verlag, 1992)のページ数。ここにあげた言及・引用の諸箇所は第六章(篇)の全体にわたるとともにすべてこの章(篇)の範囲内に含まれる。)。ここで注目すべきは、これらの引用ないし言及がもつばら、地代理論の様々な局面にかかわる諸主題についてのもののみであるということである。これに対して、MEGA², II, 4/2に含まれる草稿(第三部主要原稿)の他の諸部分とりわけ利子生み資本に関する第五章(篇)においては、われわれの確認しえたかぎりでは、ノート105から取られた引用は

Report of Committee on Bank Acts, 1857-58からのものが何カ所かでなされている以外にはない。地代論と利子生み資本の両主題で抜粋ノートの利用の仕方がこのように異なっている理由にははっきりしない。あるいは、マルクスは、利子生み資本についてのこの時期以前の研究が、このテーマについての章（篇）を執筆するに十分なほど進んでいると考えていたのかもしれない。

さらに指摘しておくべきことは、『資本論』第一部（第一巻）の完成原稿の仕上げの直前ないしこれと同時（すなわち1865年から1866年にかけての時期）になされた抜粋のうちのいくつかは、1867年9月に刊行されたこの第一部（第一巻）の中でも引用ないし言及されていることである。ノート105に含まれていてここで引用ないし言及されている著作として、Ducpétiaux Edouard, *Budgets économiques des classes ouvrières en Belgique*, Bruxelles, 1855 (K.6c), Fawcett, Henry, *The economic position of the British labourer*, Cambridge and London, 1865 (K.4/4, K.5/4c, K.6/1b,c, K.6/2), Grégoir, H., *Les Typographes devant le Tribunal correctionnel de Bruxelles*, Bruxelles, 1865 (K.5/4b), Hamm, Wilhelm von, *Die landwirtschaftliche Geräte und Maschinen Englands*, Zweite Aufgabe, Braunschweig, 1856 (K.4/4), Lavergne, *ibid.* (K.4/4, K5/3), Liebig, *ibid.* (K.3/4, K.4/2, K.4/4, K.6/1a) を挙げることができる（括弧内は該当する章・節を表す）。また、同じ抜粋ノートに引用されている著者名不詳の *Manifest der Maatschappij De Vlamingen Vooruit!*, Bruxelles, 1860. というオランダ語と思われる文献も、『資本論』第一部初版で「資本主義的蓄積の一般的法則」の章の中に引用されている。大雑把に言って、これらすべての著者・著作は『資本論』第一部のあとの方の部分に登場している。

他方で忘れてならないことは、ノート105に引用されていても、上に挙げたマルクスの経済学的著述の中でまったく言及されないままに終わったかなりの人数の著者が存在するということ、また、これらの著述中で何度か言及されている著者についてさえ相当数の抜粋箇所が利用されないままになっていたり、著者自身が事のついでに言及されているだけになっていたりすることがあるということである（この点でもっとも顕著な例はMounierの場合である。彼は『資本論』第三部「主要原稿」の第六章（篇）「超過利潤の地代への転化」の中に2度ほど名前だけが出てくるが、ノート105には彼の800ページに及ぶ膨大な著書から多数の数表を含む大量の抜粋が行われていて、それはこのノートに書きとめられた抜粋全体のおよそ五分之一を占めている。）。現行版第三部でマルクスがこのような扱いをしている根本的な理由は、この著作がマルクス本人によって最終的に仕上げられることなく、残された草稿をもとにしたエンゲルスによる編集によって作られたことにある。この点についてエンゲルスは編者の「序文」の中で次のように述べている。「引用文や典拠は、すでに第二部でもそうだったように、第一部よりもずっと少なくなっている。〔・・・〕原稿のなかで以前の経済学者たちの理論的な言説の参照が指示されているところでは、たいてい名前だけがあげられて、引用箇所そのものは最後の手入れのときに書き込まれることになっていた。それはもちろんそのままにしておくよりほかになかった。」(MEGA², II/15, S.11) すなわちマルクスは、草稿執筆に生かすために書きためておいた膨大な抜粋ノートを利用するにあたり、草稿ではその内容をいちいち転記せずに著者名や著作名だけを摘

記しておいて、印刷用原稿を最終的に仕上げる段階で抜粋ノートに含まれる引用文から適宜必要な箇所を本文中に入れていくというやり方を取っていたのである。このため、ノート105の内容をその作成時期とほぼ並行して書かれた草稿と対比してみると、一見したところ抜粋ノートで大きく取り上げられている著者や著作のうちのあるものは、それにもかかわらず、『資本論』第三部の関連箇所では非常に軽く扱われているかのような印象を与えることになった。しかし、抜粋ノートでは大きく取り上げられているのに草稿中ではほとんど無視されているように見える著者・著作であっても、最終仕上げ段階では異なった扱いとなったケースも少なくなかったであろう。いずれにしてもはっきり言えるのは、抜粋ノートと草稿の間での取り上げ方のこうした落差が、必ずしもマルクスの当該諸著作・著者に対する見方（評価、草稿それぞれの箇所の内容との関連性）をそのまま表現しているのではない、ということである。

エンゲルスはマルクスの抜粋ノートの存在やその作成時期・内容を把握していた（彼はノート105を含むマルクスの多数の抜粋ノートの表紙や裏面に、そのおよその作成時期と中身の一覧を記している）にもかかわらず、マルクス本人であれば最終仕上げの段階で草稿に施したと思われる上記のような措置は企てず、草稿を「そのままにしておく」とどめた。これは、地代論の部分のみならず、エンゲルスの手によって編集された『資本論』の第二部と第三部の全体について言えることである。したがって、これらのテキストの文面だけからマルクスの理論の個々の論点と先行諸学説との関係を十分にうかがい知ることは、かなりの困難が伴うケースが多々存在すると考えられる。マルクスの草稿のそれぞれの箇所に関連すると推定される抜粋ノートの内容を参照することが、学説史的なコンテキストにおいてその理解を促したり、あるいは、これまでの解釈を一新するような新たな読み方を可能にしたりするかもしれない。これも、抜粋ノートの編集と刊行の重要な意義のひとつと言えるのではないか。

次に、『資本論』第一部初版の刊行作業終了後の抜粋（ノート108以降）について見て行くことにしよう。メガ第四部第18巻が対象とする時期のうち、マルクスによる経済学文献からの抜粋作成の活動が活発になされた第二の局面は、『資本論』第一部のゲラの最終部分の校正作業が完了した直後の1867年8月から始まる。この時点ではマルクスは第一部（第一巻）に引き続いて数カ月のうちに第二部と第三部を含む第二巻を刊行することができるものと考えていた。そしてこの目的のために、資本の流過程を扱った部分から始まる（最終原稿となるはずであった）草稿の執筆に打ち込んだ。またそれと同時に、マルクスは再度大英博物館で、執筆準備をしていた草稿の主題に関連する経済学文献の研究を再開した。1868年3月14日付けのエンゲルス宛ての手紙でマルクスは次のように書いている。「博物館では〔・・・〕なかんずく老マウラーの最近の著書を読んで、ドイツのマルクや村落などの制度について勉強した。彼は、土地の私的所有が後代に至って初めて発生した、ということなどをくわしく論証している。そのほかにも農業にかんするフラースなどの本を見た。」（MEW, Bd.32, S.42-43）

しかし、草稿の執筆を進めていくうちに、『資本論』の次の巻をまもなく刊行するという見通しはやがて消えていった（1868年3月6日付けのクーゲルマン宛ての手紙、1868年10月7日付けのダニエルソン宛ての手紙、を参照）。しかしながら、というよりもむしろこのゆえにこそ、

マルクスはそれまでと変わることなく大英博物館での仕事を継続し、主として地代論とそれに関連するテーマ（土地所有関係の歴史、等々）についての経済学文献からの多数の抜粋でノートを埋めていった。この時期の抜粋はその大部分がノート108、109、110に含まれている。これらのノートの重要性はその分量によるだけでなく、抜粋されている著作と扱われている主題のゆえでもある。

この時期にマルクスが読んだ著作からの抜粋のあるものは、資本の流通過程に関する部分の草稿の中で取り上げられている。しかし、『資本論』第二部で言及ないし引用されている何人かの著者を別とすれば、これらのノートで取り上げられて『資本論』第一部の中で引用ないし言及されている唯一の著者はマウラー（土地所有関係の歴史に関する彼の著書：Maurer, Georg Friedrich, Ritter von, *Einleitung in die Geschichte der Markt-Hof-Dorf- und Stadtverfassung und der öffentlichen Gewalt*, München, 1854）のみである。当然のことながら、これらの言及・引用は1868年以降になされたもののみである。マルクス本人による唯一の言及は、1873年刊行の『資本論』第二版の第一章の注の中に見られる。他の二つの言及はいずれもエンゲルスによるものである（1883年にマルクスが没した直後に刊行された『資本論』第三版の第八章の注の中、そして、『資本論』第三部の第十章に付された編集者注の中）。エンゲルスによるこれらの言及は必ずしもマルクスの抜粋を元としてなされたのではないかもしれない。エンゲルスは自身自身でマウラーを読んでいた可能性が十分にあるからである（実際彼は書簡や論文その他の著作物の中で何度もマウラーに言及したりその著作から引用したりしている。）。

このように、1867年8月から1868年9月までに作成された抜粋は、マルクスのこの時期以後の経済学上の著述のために生かされることが事実上まったくなかった。この時期にマルクスが読んで抜粋した著作やその他の資料のテーマとの関連性および残された抜粋の分量の点から見て、先に引用した1868年3月14日付けの手紙で言及されているフラースが、マルクスがウエイトを置いていたと思われるもっとも重要な著者のうちの一人であることは間違いない（抜粋ノートに抜き書きされていたり書簡の中で言及されていると思われるフラースの著作には次のものがある：Fraas, Karl Nicolaus, *Geschichte der Landwirtschaft, oder, geschichtliche Übersicht der Fortschritte landwirtschaftlicher Erkenntnisse in den letzten 100 Jahren*, Prag, 1852. *Die Natur der Landwirtschaft. Beitrag zu einer Theorie derselben*, 2 Bände, München, 1857. *Klima und Pflanzenwelt in der Zeit, ein Beitrag zur Geschichte beider*, Landshut, 1847. *Historisch-encyklopädischer Grundriß der Landwirtschaftslehre*, Stuttgart, 1848. *Die Ackerbaukrisen und ihre Heilmittel, Ein Beitrag zur Wirtschaftspolitik des Ackerbauschatzes*, Leipzig, 1866.）。フラースは無視され忘れ去られた農業理論家と形容しうるかもしれないが、彼はマルクスの地代理論のみならずさらに広く土地所有と農業の理論においても大きな役割を果たしたかもしれない理論家である。しかし残念ながら、少なくとも表面的なレベルでは、彼の著作と理論はマルクスによって（エンゲルスに宛てた1868年の1月から3月にかけてのいくつかの手紙における以外には）、まったく言及も批判も吸収も展開もされなかった。マルクスは、地代に関する章（篇）の草稿を新たに仕上げる作業に再び立ち返る機会があれば、近い将来にこれら

の抜粋を再読して利用することを期待していたのであろう。しかし、残りの生涯を通じて彼はこのような機会を一度も持つことができなかつた。彼が作成したフラスの諸著作からの抜粋は忘却の淵に沈んだままとなつたのである。新メガ第四部第18巻の編集作業とその公刊は、これらの抜粋とフラスの存在を忘却から救い出すことであらう。また同時に、われわれがフラスの著作を研究して、マルクスが作成したそれらからの抜粋と彼の地代理論とをフラスの著作と突き合わせてみるならば、マルクスの地代理論と農業理論に新たな照明を当てるための一助となることが期待されるであらう。

マルクスは1868年以降も未完の『資本論』第三部の地代理論のための研究を継続して行なっている。そのうちでも特に注目されるのは70年代に入つて行なわれた当時のロシアの土地所有関係に関する研究である。エンゲルスは第三部への編集者序文のなかで次のように述べている。「この、地代に関する篇のために、マルクスはすでに七〇年代にまったく新たな特殊研究をなしとげていた。彼は、ロシアで一八六一年の「改革」以後不可避になつた土地所有に関する統計記録やその他の公刊物を、ロシアの友人たちから最も望ましい完全さで提供されていて、数年来これを原語で研究して抜き書きをつくっており、この篇を書きなおすときにそれを利用するつもりでいた。ロシアでは土地所有の形態も農耕生産者の搾取の形態も多様だったので、地代に関する篇では、第一部の工業賃労働のところでイギリスが演じたのと同じ役割をロシアが演ずるはずだったのである。残念なことには、彼にとってはこの計画はついに実現されなかつた。」(MEGA², II/15, S.10) マルクスは1860年代末以降、地代論についてだけでなく、彼がそれまでに展開してきた様々な理論部面において、非ヨーロッパ地域に関心を寄せそれまでのヨーロッパ中心主義的な傾向（自ら刊行した『資本論』第一部にもこれが当てはまることは、ロシア・ナロードニキ活動家のザスーリッチに宛てた晩年の手紙で彼自らが認めている通りである）に自ら再検討を加えようとしたが、地代や土地所有の問題についてのロシアへの関心も彼のこうした研究動向の一部をなしていたと思われる。しかし、「経済学批判」体系（『資本論』はその最初のごく一部）の根底をも揺るがしかねないこのような試みは具体的な結果を生むことなく終わったのであり、地代論に関しても上の引用文中でエンゲルスが述べている通り、膨大な資料の収集とこれに基づいて作成された抜粋ノートが残されているのみである。これらの「マルクスの文献的遺産」から彼の晩年の理論や思想がどこまで解明できるかは、今のところまったくの未知数にとどまる。

新メガ第IV部門第19巻の概要とその意義

第18巻につづく第19巻には、先にその内容を検討した抜粋ノート108の作成時期と一部重複する1868年9月から1869年9月までの約一年間に、マルクスが作成した抜粋・切り抜きのノートが収録されることになっている。18巻とは異なつて19巻に収録されるオリジナル資料にはエンゲルスの手になるノートは含まれていない。このように、作成時期に一部重複があるにもかかわらず、68年9月からのノートが新メガでは別の巻に分離して収められるのは、これらを18巻に合わせて収録するとひとつの巻の分量が大きくなりすぎるので二つに分けたという技術的な理

由もちろんあったであろうが、それ以上に本質的な理由は、これら二つの巻に別々に収録されるノートに抜粋（ないし切り抜き）されているマルクスの研究した原資料の性質の相違にある。すなわち、第18巻が地代論を主要なテーマとする主に単行本形態の著作物からの抜粋を含むのに対して、第19巻ではその作成時期からおよそ2年半も遡った時期からの新聞などの定期刊行物に掲載された60年代中葉の恐慌に関連する記事が中心となっている。この意味で第19巻は、1857-8年にヨーロッパ（そしてアメリカ）を襲った前回の恐慌についての同時代の新聞雑誌からの抜粋・切り抜きを収録する同じ新メガ第IV部門第14巻と並んで、新メガ全体における恐慌を主要なテーマとした二巻のひとつとすることができる。具体的にその内容についてかいつまんで見て行こう。

第19巻に収録される抜粋ノートはマルクスによるもののみであり、次のやや性格の異なる8冊からなる。

第一は、B102という番号（この番号は、マルクスやエンゲルス自身が付したのではなく、20世紀に入ってからマルクスの文献遺産を取得して収蔵することになったアムステルダムやモスクワの研究所において整理のために付されたもの）がふられた1868年9月から12月にかけて作成されたと推定されるノートである。このノートに抜粋されている文献は次の通りである。H.E. Roscoe, *Kurzes Lehrbuch der Chemie*, Braunschweig, 1867. *The Money Market Review* (1866年5月28日から1867年12月まで。2年以上も前からのバックナンバーからの抜粋であることに注意)。The Standard (1868年12月4日号からの切り抜き)。末尾の3ページに*The Money Market Review*紙からの抜粋記事の目録 (Register) が付されている。

第二は、B101という番号が付された1868年10月から1869年1月にかけて作成されたと推定されるノートである。このノートに抜粋されている文献は次の通りである。*The Economist*, 1866年1月6日から1867年12月まで（バックナンバーからの抜粋。ノートB102に抜粋されている*The Money Market Review*紙の発行期間とほぼ重なる）。*The Social Economist* (1868年10月1日号、切り抜き)。The Economistからの抜粋の途中に割り込むように当該ノートの21ページ目と22ページ目の一部に貼り付けられている。1866年・1867年の*The Economist*からの抜粋記事の目録。*The Money Market Review*, 1866年5月19日から1867年12月28日まで（ノートB102に抜粋されているのとほぼ同時期の同じ新聞からの抜粋。ただし異なる記事が抜粋されている）。*The Money Market Review*からの抜粋記事の目録。

第三は、B105という番号が付された、1869年5月までに作成されたと推定されるノートである。表紙にエンゲルスの筆跡による内容目録が書き込まれており、また2ページ目に「1869年ノートI」というタイトルが記されている。このノートに抜粋されている文献は次の通りである。Bank of England and Money Market, Operation of Clearing House. 主として数表。1868年中のデータであり、*The Money Market Review*紙の特定の欄からマルクスが自分で作成した集中的な抜粋を数表の形にしたもの。*The Money Market Review*, 1868年1月4日から12月26日まで。ノートB102とB101に抜粋されていた時期に続く時期の同紙からの抜粋。*The Economist*, 1868年1月4日から12月26日まで。ノートB101に抜粋されていた時期に続く時

期の同紙からの抜粋。*The Money Market Review*と*The Economist*からの抜粋記事の目録。G.J. Goschen, *The Theory of the Foreign Exchange, London, 1866*. E.F. Feller/C.G. Odermann, *Das Ganze der kaufmännischen Arithmetik, 1859*.

第四は、B106という番号の付された、1869年2月から1872年8月にかけて作成されたと推定されるノートである。表紙にエンゲルスの筆跡による内容目録が書き込まれており、番号の付されていない最初のページに「1869年ノートII」というタイトルが記入されている。タイトルの記されていない新聞からの切り抜き1ページ分（1869年5月19日という日付が手書きで入れられているが、これは同月20日付けの*The Daily News*の記事の一部であることが判明した）。E.F. Feller/C.G. Odermann, *Das Ganze der kaufmännischen Arithmetik, 1859*。ノートB105での抜粋の続き。John Leslie Foster, *An Essay on the Principle of Commercial Exchanges, 1804*からの抜粋（マルクスは、エンゲルスからフォスターの『為替について』を1869年2月末に送ってもらって読んでいる。1869.3.01付けの手紙を参照（Vgl.MEW, Bd.32, S.263））。第19巻に収録されるのはここまで。このノートに含まれる抜粋のうちこれ以下の部分は、1869年9月より後に作成されたとの推定に基づき第21巻に収録の予定。

第五は、P001という番号の付されたノートである。表紙にマルクスのもと思われる筆跡でTrade and Finance, 1868 Marxという表題が記されている。すべて新聞からの切り抜きからなる。この表題は新聞紙名ではなく、*The Daily News*紙（1846年にCharles Dickensが創刊し彼みずから初代編集長も務めた）に連載されていたと思われるシリーズ記事のタイトルであろう。1868年8月から1869年8月までの号からの切り抜きを収録。

第六は、P002という番号の付されたノートである。表紙にマルクスのもと思われる筆跡でTrade and Finance, 1869 という表題が記されている。内容はノートP001と同じくすべて新聞からの切り抜きである。組版の状態から同一紙の続きと思われる。1869年8月から1870年始めまでの号からの切り抜き。1869年9月までの抜粋を収録するという19巻の編集方針との整合性の問題が生じる。

第七は、P003という番号の付されたノートである。表紙にマルクスのもと思われる筆跡でSocial Cases, 1869 という表題が記されている。書き込みがあり通しページ番号の入っている（マルクスの子供のうちの誰かの？）学習用ノートが使用されている。同じくすべて新聞からの切り抜きである。切り抜きが貼り付けられているのはノート全体の約半分。残りはマルクスの子供によるとと思われる書き込みで埋められたページのままになっている。P001,P002と同じく表題は新聞紙名ではなく、*The Daily News*紙に連載されていたと思われるシリーズ記事のタイトルであろう。1869年8月から1870年12月までの号からの切り抜き。1869年9月までの抜粋を収録するという19巻の編集方針との整合性の問題がここでも生じる。このノートの最終ページに切り抜き記事についての説明と思われる記述が書き込まれている。筆跡はマルクスのものでエンゲルスのものでもないように思われる。Trade and financeという語句が見られることから、この書き込みはノートP003だけでなくP001とP002にも関連するものと思われる。

最後の第八として、アムステルダムの子社会史国際研究所に所蔵されている以上の7冊に加え

て、モスクワのロシア・センターに所蔵されている別の1冊が存在する。これは正確にはノートではなく、*The Illustrated Universal Pocket Diary and Almanac for 1869*という小冊子であり、その空欄の若干の箇所にマルクスが書き込みを入れたものである。1869年3月から1871年8月に作成と推定される。現物の全体のデジタル画像データは、ロシア・センターのヴァーシナ女史の尽力により2013年に日本に送られてきた。これまで日本で編集のために使用していた以前にモスクワから送られてきた不完全なフォトコピーと照合することにより、日本でこの部分についてのテキストを作成することが可能となった。内容は概略以下の通りである。住所録、計算、数学的諸定式（剰余価値率と利潤率を計算するための諸定式）、文献目録、1870年と1871年の*Volksstaat*紙のうちマルクスの手元のない号の目録、および、M. Wirth, *Geschichte der Handelskrisen*, Frankfurt a.M., 1858からのごく短い抜粋。

以上が、第19巻に収録される8冊のノートの内容の概要である。

新メガの編集作業において、第IV部門に特有のステップとしてマルクスやエンゲルスの抜粋をその元となったオリジナル文書と照合して、両者の異同を明らかにするという作業が存在する。さらに、この作業において、新聞記事からの抜粋は書籍や雑誌からのそれとは異なる特有の困難を呈する。抜粋された記事の紙名・日付・ページ数・タイトルが正確に示されていれば抜粋箇所を特定して照合することに特別な困難を伴うことはないが、新聞記事からの抜粋に示される出典データはせいぜい紙名と発行日付のみである。しかも、これら最低限の手がかりさえ欠けていることもめずらしくない。たとえこれらの手がかりがあったとしても、版型が大きくしかもページ数の多い新聞（上記リストに含まれる*The Economist*, *The Daily News*, *The Money Market Review*はまさにこうした種類に属する）からの抜粋の場合、元の記事を特定するのに大きな労力と時間を要するのが常である。まして、日付も示されておらずしかも抜粋・切り抜きが時系列に従ってではなく極めてランダムになされている場合には、当該個所の特定は往々にして絶望的な困難を呈する。残念ながら、筆者がこれまで試みたマルクスの新聞切り抜きの若干のサンプル調査では、このようなケースが多く見られた。第19巻は、全体の分量という点ではメガ第IV部の他の諸巻と比較しても大きい方であるが、しかし、抜粋されている文献の点数は比較的少ない。従って、オリジナル文献の探索・収集、そして、これらと抜粋との照合にはあまり大きな労力は要しないように思えるかもしれない（反対に第18巻は多数の著作物からの抜粋を含んでおり、この点で多大の時間と労力と経費を要したが、にもかかわらずいまだに所在を突き止めることができずしたがって照合のために入手できていないオリジナル文献が少数存在する）が、抜粋・切り抜きされている文献のうちでは新聞記事が多数を占め、そのオリジナル箇所の特定には上記のような特殊な問題があることを考えると、照合作業には予想を超える労力と時間が必要であったが、さいわい2010年度からの4年間にわたって本巻のために科学研究費補助金が交付されたため、作業は大いにはかどり現在ではほぼ完了している。

ところで、上記の抜粋・引用文献の一覧から、第19巻が収録対象とする時期にマルクスが記録に留めている文献の内容には次のような特徴が存在する。1. 単行書は5点のみと極めて少数でありそのうちの経済学関係の3点は外国為替と恐慌史に関するものであること。2. 新聞・雑

誌特に新聞からの抜粋が大きなウェイトを占めており、新聞からは抜粋とともに大量の切り抜きがなされていること。しかも抜粋や切り抜きは、作成時期と発行日付がほぼ並行していると推測される*The Daily News*からのものを除いて、その他はほとんどが1866年に遡るバックナンバーからのものであること。このことは、マルクスが当時の経済情勢の推移に強い関心を抱き、直近の過去にまで遡って1860年代後半に勃発した恐慌の実情を貨幣や金融の側面から観察しようとしていたことを窺わせる。全体として、この時期のマルクスは60年代前半からその直前までの時期とは異なって、複数の分野にわたる経済学文献を貪欲に渉猟して読書ノートを作成するというよりも、抜粋・切り抜きの作成という活動に関する限りでは、同時代の経済動向の観察に主眼を置いていたように思われる。これらの特徴は、筆者が第19巻の編集に先立って関与してきた第18巻——その対象期間は1864年2月から1868年9月——、また、将来予定されている編集作業にむけてその概要を知る機会があった第17巻——対象期間は1863年5月から7月——と対比してみれば明確である。

さて、新メガ第IV部第19巻に収録予定のマルクスの抜粋・抜き書きの内容は、前述のようにこの時期以前の60年代の抜粋ノートの内容とは異なる諸特徴を有するのであるが、このような特徴をもたらした要因は、マルクスによる『資本論』の仕上げのための作業の進捗状況とともに、1860年代後半のヨーロッパの経済状況とりわけ1866年の新たな恐慌、しかも、その10年前の1850年末（『経済学批判要綱（グルントリッセ）』と呼ばれるマルクスの「経済学批判体系の第一草稿」の執筆やその最初の部分の『経済学批判（第一冊）』としての刊行がなされた時期）の恐慌とは異なる諸特質をもった、ほぼ10年周期の経済恐慌の勃発であった。第19巻に収録される抜粋・切り抜きノートの内容の多くは、1860年代後半のこうした経済変動の状況に対するマルクスの反応の一端（恐慌の推移を貨幣・信用面から観察し一定の理論的な見解を引き出すための基礎データを収集すること）を示すものと考えられる。しかし、60年代に起きた恐慌現象（価格と生産の落ち込み、失業の増加）は1866年から1867年にかけてそのピークをむかえた。おそらくそのためであろうが、マルクス（およびエンゲルス）が1868年9月から1869年9月までの間に執筆した諸論説や書簡のうちには、MEWの第16巻と第32巻に収録されているものによる限りでは、当時の経済状況に対する彼らの反応はほとんど示されていないように見受けられる。この時期のマルクスとエンゲルスは彼らの間での手紙のやり取りの中で当時の経済状況について何度か話題にしている（エンゲルスのマルクス宛ての手紙、1868年12月11日付け、1869年5月10日付け、同6月22日付け。マルクスのエンゲルス宛ての手紙、1869年3月01日付け）が、いずれもイギリスないしヨーロッパの経済情勢を大局的にそして歴史的に問題にしたものではなく、彼らの近辺で生じた事態や（おそらくたまたま）目にした新聞報道から得た情報について、互いに報告し合っているというにすぎない。

むしろ、新たに勃発した恐慌についての大局的・歴史的な観察は、1866年とその翌年に書かれた手紙と論説、何よりも1867年4月初旬まで完成稿の作成が続けられた『資本論』第I部の中に見られる。

マルクスは1866年5月17日付けのエンゲルス宛ての手紙で次のように言う。「現在の恐慌は

僕にはたんに早まった金融上の特殊恐慌のように思われる。それが重大になるかもしれないのは、ただ合衆国における経過が悪化する場合だけだが、それにはおそらくまだ時期が熟していないのだ。」(Bd.31, S.219) これに対してエンゲルスは同25日付けの手紙で次のように応じている。「とにかく恐慌は早くすぎた。そうでなくて67年か68年にでもくるであろう十分なしつかりした恐慌ならば、ことによるとわれわれを破滅させることができるかもしれない。」(Bd.31, S.220) これらの手紙は、1866年半ばの恐慌勃発の初期に、彼らがともにいまだその性格と展開についてはっきりとした見方を持ちえていないことを示しているようである。

これに対して、マルクスは1867年9月刊行の『資本論』第一部の中で、同年3月末までの状況の観察に基づいて今回の恐慌について次のように述べている(いずれも同第章第六章「資本の蓄積過程」第1節「資本主義的蓄積」のc)「資本主義的蓄積の一般的法則の例解」の中の文章)。

「現在、1867年3月には、インド＝シナ市場は、イギリス綿業者の託送によって再びすでにまったく供給過剰になっている。1866年には綿業労働者のあいだで5%の賃金引き下げが始まり、1867年には同様な処置のためにプレストンでは20,000人のストライキが起きた。」(Karl Marx, *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie, erster Band*, Hamburg, 1867, MEGA², II/5, Dietz Verlag, Berlin, 1983, S.525) この注の文言に対して後にエンゲルスは次のような補足を加えている。「これは、それに引き続いて起きた恐慌の前奏曲だった。——D.H.」(Karl Marx, *Das Kapital., Kritik der politischen Ökonomie, erster Band*, Hamburg, 1890, MEGA², II/10, Dietz Verlag, Berlin, 1991, S.585)

「ロンドンをも最も激しく襲った1866年の恐慌が、スコットランド王国よりも人口の多いこの世界市場中心地でひき起こした貧民増加率は、1866年には1865年に比べて19.5%、1864年に比べて24.4%だったが、1866年に比べての1867年の最初の数か月間の増加率はもっと大きかった。」(MEGA², II/5, S.527)

「1857年には毎回産業循環の終点になる大恐慌の一つが起きたということが思い出されるであろう。次の循環期は1866年に終わった。本来の工場地帯では、多額の資本を通例の投下部面から貨幣市場の大中心地に駆逐した綿花飢饉によってすでに割引きされていたので、恐慌は今度はおもに金融的な性格を帯びていた。1866年5月にこの恐慌は起きたが、ロンドンのある巨大銀行の破産がその信号となり、続いて無数の金融的思惑会社が倒れた。」(MEGA², II/5, S.540)

恐慌は1866年に勃発し1867年にかけてその激しさを増したこと、そしてこの恐慌が巨大銀行の破産をその発端の合図とする金融的性格を帯びていること、この2点が上の『資本論』からの引用文に示される1867年第一四半期までのマルクスによる恐慌の認識の要点である。前者について、その後の(とりわけ1868年から1869年にかけての)経過がどのように把握されていたかを知る手掛かりは、上述のようにMEWの第16巻と第32巻に収録されている諸文書には含まれていないように思われる。後者は、これまで詳細に見てきた第19巻収録予定の抜粋・切り抜き資料の多くが貨幣や金融に関連するものであることと理由説明となりうるであろう。

ところで、ロンドン亡命中のマルクスは生活費を工面するために長い間ジャーナリストとして活動していた。とりわけ、ヨーロッパ特派員としてアメリカのNew York Daily Tribune紙へ

刻々と変化するヨーロッパ情勢を伝える記事を送り続けていたことはよく知られているが、マルクスがこの新聞に寄稿していたのは1852年から1862年までの約10年間であったし、また、MEWのデータによるかぎり、1862年以降はマルクスもエンゲルスも特定の新聞に継続的に記事を送り続けるという活動は行っていない。この種の新聞記事が存在していれば、当時のヨーロッパの経済情勢に関連するマルクスの認識について、あるいは上に見た以上のことをいくらかでも窺い知ることができたかもしれない。

以上の考察から、1868年9月からの一年間のマルクスによる大量の新聞記事の抜粋・切り抜きのうち、最も分量の多い*The Money Market Review*と*The Economist*との二紙からのものが、それぞれ1866年5月末から1868年末まで、1866年1月初旬から1868年末までと、2年以上も遡った時期からほぼ切り抜き作成と同時期までの間にわたってなされているのはなぜか、その理由が理解されるように思われる。すなわち、マルクスは恐慌勃発から2年以上が経過した1868年秋の時点から、この恐慌についてその当初からのデータを収集して自分自身の本格的な研究に備えようとしていたのではないだろうか。これが、第19巻収録予定の抜粋・切り抜きの大部分を行うにあたって、マルクスが目指していたことであろう。

最後にこれらのノートに収集された材料をマルクスがその後どのように扱ったかについて述べておきたい。結果的には、IV/19に収録予定の8冊のノートの内容は、ほとんどすべてまったく利用されないまま放置された。しかし、*The Money Market Review*と*The Economist*の少数の抜粋記事のみは例外的に後で使用されている（ただし、『資本論』第三部の「信用」に関連する草稿ではなく、これらの抜粋が作成された直後に執筆された第二部の第二草稿において。Vgl. II/11, S. 107, 108, 121, 122, 124, 126, 194, 212.このうちのいくつかはエンゲルスが編集して1885年に刊行した『資本論』第二部にも取り入れられている）。68年から69年にかけて作成された抜粋・切り抜きは、『資本論』の続巻とりわけ第三部を仕上げるための準備作業の一環であるとともに、60年代中葉の恐慌についての研究でもあるという、二重の性格を持っていた。そのため、貨幣・金融・信用に関連する記事とともに、土地所有、労使関係、国際関係を含む広範なテーマを扱った記事が集められており、この抜粋作業が何を目的に行われたのかやや分かりにくくなっている。

それはともかく、この抜粋作業の後マルクスは『資本論』第二巻のための草稿執筆を断続的に行うとともに、そのための準備をさらに続けた。しかしそのテーマは「信用」からふたたび「地代」に移っていった。しかも69年から以降はアイルランドやロシアといったヨーロッパの周縁部ないし非ヨーロッパ圏の歴史や土地制度が研究の中心になっていった。IV/19にすぐ続く時期の抜粋ノートを収録するIV/20, IV/21にはもはやイギリス資本主義における「信用」や「恐慌」というテーマは現れず、上に見たようにIV/19収録の抜粋はその後顧みられることはなくなった。このような転換のひとつの契機になったのが、69年の秋に『資本論』の最初のロシア語訳者となるダニエリソンからフレロフスキー（Флеровский, Н）の『ロシアにおける労働者階級の状態』（*Положение рабочего класса в России*, С.П.Б. 1869）を送られたことであった。すでに50歳を過ぎていたマルクスはこの時からロシア語の学習を始めた。その後もダニエリソン等の

ロシア・ナロードニキから送られてくるロシア語文献によって、マルクスはロシアの社会・経済とりわけ土地所有制度や農業・地代の研究を続行することになった。ここでも依然として『資本論』の完成という大きな枠組みは維持されていたとはいえ、その具体的な研究内容はこのように60年代末から大きく転換していったのである。

むすびに代えて

本稿は、『資本論』の草稿研究の日本における最近の動向について、筆者自身がかかわってきた新メガ第IV部門の二つの巻の編集作業を中心にして述べてきた。もとより、『資本論』の草稿は新メガ第II部門に属する諸巻に収録されており、これらこそが草稿研究の固有の対象とすべきものである。また、草稿の研究は、厳密な編集のもとに研究のための行き届いた補助資料を付して新たに刊行されたマルクス・エンゲルスの関与した『資本論』の全刊本を再検討する作業の補助的な手段である。2012年に第II部門が完結して、世界の研究者はこれらのすべてを参照しうることになった。このような現在の状況においては、草稿の参照は『資本論』を研究するために不可欠の手続きの一部となっている。

第IV部門の抜粋ノートはこれらの中心となるべき研究対象に対して、いわばさらに補助的な位置にあるということもできるであろう。しかし、本稿の行論中にいくつかの例によって示唆したように、マルクスの研究全体の基層部にある抜粋ノートは、草稿執筆から著作の刊行へと向かう過程の理解に不可欠の資料を提供するものであり、今後の『資本論』研究は長い目で見れば草稿とともに抜粋ノートを無視することはできなくなるであろう（また同時に、第III部門でも新メガにおいて新たに多数の書簡——とりわけマルクス・エンゲルスからの第三者宛書簡と第三者から彼らに宛てられた書簡——がおおやけにされつつあり、これらを考慮に入れることも不可欠である）。

新メガを構成する四つの部門のうち、本稿でそのごく一部（二つの巻のみ）を取り上げた第IV部門は、すでに全体の完結を見ている第II部門とは反対に、その刊行がもっとも遅れている部門である。2015年現在、マルクスとエンゲルスの最初期の第1巻から1850年代初頭のロンドンでのマルクスの経済学ノート（いわゆるロンドン・ノート）を含む第9巻までは出そろっているものの、その後の20巻あまりはそのほとんどが未刊である（もちろん、中には本稿で紹介したように編集作業が進められているものもあるが）。第IV部門の諸巻のうち、「経済学批判」ないし『資本論』の構想・準備・仕上げの過程と比較的緊密な関係にある経済学関係の抜粋を収録しているのは、1840年代の抜粋ノートが収録されている第6巻までの最初の諸巻を別とすれば、50年代のマルクスのブリティッシュ・ミュージアムでの集中的な経済学研究の結果であるいわゆる「ロンドン・ノート」を収録した第7巻から第11巻までの5巻と、60年代における『資本論』草稿の執筆との緊密な関連においてなされた研究の跡をとどめる抜粋が入る第17巻から第19巻までの3巻である。このうち「ロンドン・ノート」は第10巻と第11巻が近い将来に刊行されればすべて揃うことになり、これにより『資本論』の第一草稿である『経済学批判要綱』の執筆に向けてその直前にマルクスが行った経済学研究の全容が明らかになり、『要綱』の研究さらにはそ

の後の『資本論』諸草稿の研究が大きく前進することが期待される。

しかし60年代に入ってから最初のまとまった経済学関係の抜粋を収録する予定の第17巻は、第18巻・第19巻とともに日本の研究者に委託されているものの、現在にいたるまでいまだまったく手つかずの状態のままであり、しばらくは刊行の見通しさえ立たないであろう。これはもつぱら、優先された第18巻と第19巻の作業のために第17巻には今まで着手さえできていないという、日本の編集担当者たちの力量不足に起因するものと言わなければならない。この意味では、抜粋ノートまで含めた『資本論』およびその草稿の研究を本格的に進めていくための資料的基礎がすべて揃うのは、まだかなり先のことになるであろう。

だが幸いなことに、ドイツの公式機関であるGWK (die Gemeinsame Wissenschaftskonferenz) とBBAW (die Berlin Brandenburgische Akademie der Wissenschaft) は、2015年10月30日付で、当年度をもって一端終了することとなっていた新メガのプロジェクトを今後16年間にわたる新規のプロジェクトとして更新することを正式に決定した。この決定により、当該期間中、BBAW内には新メガ編集に従事する専属の職員が配置されドイツ政府からの財政的支援が保障されることになった。新メガの編集作業に公的な機関が予算の裏付けをもって関与している例は他にはなく、まさに頼みの綱といってもよい存在である。これまで通り、IMESの中核機関としてのこのBBAWを軸とした国際的な連携・協力体制の下に、なお未刊の三分の一程度の巻の準備を継続的に行っていくことが可能となった。また、今回の決定では印刷物としての従来の形式による刊行と並行してオンライン版の公表にも力が注がれることになっている。さしあたって与えられた今後の16年のあいだに、第II部門に引き続き残りの三つの部門も相次いで完結にいたり、新メガそのものが全体として完了することを願わずにはいられない。これには当然、第IV部門の上記の三つの巻の編集作業の完了も含まれる。